

漱石『吾輩は猫である』と春園『千眼記』

— 「猫」と「蠅」の役割と「文明開化」を巡る比較考察 —

李美正*

目次

- | | |
|------------------------|------------------------------|
| 1. はじめに | 3. 『千眼記』における「蠅」の役割 |
| 2. 『吾輩は猫である』における「猫」の役割 | 3-1 救われる「蠅」 |
| 2-1 「猫伝」の猫 | 3-2 利用される「蠅」 |
| 2-2 利用される「猫」 | 3-3 未完成作品における「蠅」 |
| 2-3 殺される「猫」 | 4. 『吾輩は猫である』と『千眼記』における「文明開化」 |
| | 5. おわりに |

1. はじめに

夏目金之助（1867～1916：雅号は漱石、以下漱石と称する）と李光洙（1892～？：雅号は春園、以下春園と称する）は、西洋文物の移入とともに押しかけた近代という新概念を受容するうえで、誰よりも苦悩した作家として、日本の近代文学史上と韓国の近代文学史上においてそれぞれ評価されてきた。このような二人の作家としての位置づけを考慮してみると、近代化をめぐる両作家の比較は十分価値のある研究であると思われる。本稿では漱石と春園における近代、とりわけ「文明開化」がいかなるものであるのかを、漱石の『吾輩は猫である』と春園の『千眼記』を通して考察する。

漱石の『吾輩は猫である』は1905年1月から1906年8月まで『ホトトギス』に十回にわたって断続連載された作品である。この『吾輩は猫である』は当時好評であったとよく言われるが、それは『吾輩は猫である』の大量の追隨作¹⁾を通して確認できる。漱石は『吾輩は猫である』で「猫」を通して人間世界を笑い、さらに日本の「近代化」及び「文明開化」などを辛辣に批判したのである。一方、春園の『千眼記』は1926年1月5日から3月6日まで『東亞日報』に連載されたもので、未完成のまま終わっている²⁾。春園

* 広島大学大学院 博士課程後期

1) 『吾輩は猫である』の追隨作については、日比嘉高氏の「吾輩の死んだあとに」という論文で詳しく論じられている。日比氏は追隨作において「猫」に取って代わる「鼠、犬、蚕、馬、豚、千里眼、フロックコート、孔子、フィルム、結核菌、カモ、ハスキー、エイリアン、らんちゅう、霊、神、施主、料理長、お魚、シッポ、容器、教卓、企業法、共同水道、輸出貨物……」などを列挙し、「これらはすべて『吾輩は○○である』の○○に代入されてきた、歴代の主人公たちである」とする（日比嘉高（2001）『吾輩の死んだあとに』、『漱石研究 第十四号』、翰林書房、p.149）。人間ではない動物などを主人公にする物語が漱石の『吾輩は猫である』によって当時流行するようになったということであろう。

2) 『千眼記』は、1926年1月から「バリ」（蠅）という題名で東亞日報に連載されたが、61回で未完のまま中断することになった。理由は東亞日報に対する總督府の停刊処分のためである。ところが、この作品はのちに一部が書き改められ、またある部分が新たに付け加えられて1927年4月から同年11月まで、8回にわたって『朝鮮文壇

は『千眼記』で「蠅」の目を通して近代韓国の現実を通察し、そこに内在する矛盾を「蠅」と意思疎通のできる「僕」という語り手を借りて叙述する。

兩作品とも人間ではない動物が社会批判及び諷刺のための装置として仕掛けられていることが分かる。柳相熙氏³⁾は既に兩作品を「風刺小説」と規定し、漱石に関する春園の言及⁴⁾や外面的に共通点が多いこと⁵⁾などからこの二つの作品の影響関係について指摘したことがある。筆者も春園の日記や隨筆を通して兩作品における影響関係の可能性⁶⁾については肯定的な立場に立っているが、この問題は別考にゆずり、本論文では兩作品での「猫」と「蠅」の役割の有する意味を把握し、兩作家の追求しようとした「文明開化」とは何かについて焦点を合わせて論を進めていきたい。

2. 『吾輩は猫である』における「猫」の役割

2-1 「猫伝」の猫

漱石が小説家になるのに大きく作用をした作品はほかならぬ『吾輩は猫である』である。『吾輩は猫である』は高浜虚子から勧められて書いた作品で、一章だけで終わるつもりであった短編の「猫伝」が好評だったので、續きを書いて十一章にもなる長編小説になった。最初に書いた「猫伝」は、捨てられた小猫が中學教師の珍野苦沙弥(「主人」)に救われて飼われる話から始まる。つまり、「猫」は下女のおさんによって何回も追い出される羽目になるが、幸いにも「主人」によって救われる。救われた「猫」は猫の身辺のことや猫の目に映った人間世界、特に「主人」とその家族の話などを諧謔的に描く。これがまさに「猫伝」での「猫」の役割であろう。この一章は後に執筆された二章からの長編小説とは噛み合っていないとも言われている。それは作中人物の呼び方などが後になって変わる—例えば「猫伝」での美學者が二章からは迷亭先生と呼ばれる一点や、内容的にも、一章だけでは日露戦争中だとは思われないほど、時代背景に関する言及は省略されているが、二章からは時代背景の描寫などが徐々に濃くなる点などから明らかになろう。このような要因から見ると、「猫伝」として書かれた一章と、

』という芸誌に『千眼記』と改題され再び發表されたのである。」(柳相熙 (1982) 「漱石の『吾輩は猫である』と春園の『千眼記』との比較—動物の働きと諷刺性を中心に—」『龍鳳論叢』第1輯、全南大學校、p.357)

3) 柳相熙 (1982) 「漱石の『吾輩は猫である』と春園の『千眼記』との比較—動物の働きと諷刺性を中心に—」、上掲書

4) 柳氏は当時日本人の關心を集めていた漱石の作品を春園が讀んだ証據として「夏目漱石の『吾輩は猫である』は私の金で買ったが、『坊ちゃん』、『虞美人草』、『三四郎』、『文學論』という本は全部碧初君が私にくれた物だ(それは中學校に通っている時期だった)。夏目漱石から私の學んだのが何なのかは分からないが、私は國木田獨歩の短編と共に夏目漱石の長編が好きだった。」(『文壇生活三十年の回顧』、朝光2 卷6 号、pp116~117) という隨筆を擧げている。

5) 彼は作品の構造や動物の働き、風刺の主題などの項目を擧げて兩作品における共通点と相違点を論じ、さらに影響関係をも説明しようとした。

6) 早稲田大學哲学科出身の春園は二度に渡る日本留學を通して新文學に接する。春園は「私が小説を推薦すると」(1931年1月5日) (李光洙 (1971) 「私が小説を推薦すると」(李光洙全集第十卷)、三中堂、pp.586~587) という文を通して世界の作品を推薦しているが、その中で日本の作品は國木田獨歩の『諸短編』と漱石の『坊ちゃん』『吾輩は猫である』をあげている。また柳氏も説明しているように春園は「文壇生活三十年の回顧」という隨筆を通して「夏目漱石の『吾輩は猫である』は私の金で買った」「夏目漱石の長編が好きだった」と回想している。これらによれば春園の漱石の作品に對する特別な關心、とりわけ漱石の『吾輩は猫である』への格別な關心が窺える。

長編小説として書かれた二章から十一章までは違う目的で執筆されたと推測できる。それ故に、二章からの「猫」は単純に一章のような「猫」中心の話を語る役ではなく、その「猫」の役割が変わっていくことが分る。

2-2 利用される「猫」

「猫伝」では「主人」によって救われた「猫」が主人公として設定されているが、次第に変わって、五章になると、「猫」が主人公というより、語り手に受身する。しかし、十一章の終わり近くからは再び「猫」が主人公として復歸する。これに関連して、李國棟氏は『吾輩は猫である』での「猫」の位置の変化に注目し次のように述べている。

「第一章には、「猫」が間違いなく主人公として描かれているのである。第一章に限っていえば、タイトルと主人公のズレが全く存在しないのである。しかし、こんなによくまとまった珠玉のような文章が高浜虚子主宰の雑誌『ほととぎす』に発表されると、『吾輩は猫である』というタイトルと小説の内容が次第にずれてしまった。(中略) 第三章に入ると、「猫」が「人間界の一人」となり、人間と同等の立場を得た。(中略) 第五章はまさに『吾輩は猫である』の分岐点であり、人間よりも高い立場が「猫」を主人公から語り手に変身させたのであった。第五章から第十章までに、「猫」自身の事がほとんど描かれず、社会批判や文明批判が急に増えているのは、全く「猫」が完全に超越的な語り手に変わったためである。(中略) 十一章の終わり近くから、「猫」はまた語り手から主人公に変身したのであった⁷⁾

李氏は、一章での「猫」は主人公であったが、三章から徐々に変わって、五章になると語り手としての「猫」が存在するという。しかし、軸を換えて内容的な面からみると、「猫」中心の物語から「主人」中心の物語への変化はすでに二章から始まりつつあると思われる。前述したように、「猫伝」では日露戦争の最中だとは思われないほど、時代背景に対する描寫などが見られないが、二章からは日露戦争に対する言及が見え始めるなど、段々と「猫」が扱う物語の素材が変わっていくのである。では、一章で「猫」中心の物語であったのが、なぜ二章からは「主人」中心の物語に変わっていかねばならなかったのだろうか。それは李氏も述べている通り、「社会批判や文明批評」のためであろう。短編としての第一章と、長編としての二章から十一章までとは書かれた目的が異なるため、「猫」中心の物語は変化しなければならなかったのである。十一章の最後の数頁だけを除くと、十一章はまさに文明批判のために書いたと言っても過言ではないほど、日本の近代文明への批判が主流を成している。一章と終章である十一章(十一章の終わりの数頁だけは除外)の二つの章だけを比べてみると、一層その差が鮮明になる。

「猫伝」で救われた「猫」は、作者の目的達成のため、二章からは利用されるようになる。さて、救われた「猫」はいかに利用されるのであろうか。

段々人間から同情を寄せらるゝに従つて、己が猫である事は漸く忘却してくる。猫よりはいつの間にか人間の方へ接近して來た様な心持になつて、同族を糾合して二本足の先生と雌雄を決しやうと云ふ量見は昨今の所毛頭ない。夫のみか折々は吾輩も亦人間界の一人だと思ふ折さへある位に進化したのは頼母しい。(『吾輩は猫である』、三章、p.87)⁸⁾

7) 李國棟 (2001) 「『吾輩は猫である』の伝統様式」『魯迅と漱石の比較文學的研究』、明治書院、pp.96-98

まず、作者は「猫」を利用するため、「猫」に人間への親密感を持たせる。「猫伝」での「猫」は「我輩の尊敬する筋向の白君杯は逢ふ度毎に人間程不人情なものはないと言つて居らるゝ」と述べたり、「元來人間といふものは自己の力量に慢じて皆んな増長して居る。少し人間より強いものが出て来て窘めてやらなくては此先どこ迄増長するか分らない。我儘も此位なら我慢するが余輩は人間の不徳については是よりも數倍悲しむべき報道を耳にした事がある」と述べるなど、人間に對して距離感を持っている。その上、「猫」は書生に捨てられたり、おさんに追い出されたりするなど、人間によってつらい経験を。それにも関わらず、三章での「猫」は人間に對する嫌悪感はまったくなくなり、むしろ自分がまるで人間に進化したように思う。これに對して伊豆利彦氏は「『猫』の世界が猫と主人や主人一家との關係から、人間同士のやり取りやドラマに發展するにつれて、始めは専ら人間世界を異化する動きをした『猫』が、次第に主人に同化し、時には主人の心中を代弁したりするようになる」⁹⁾と述べている。これは作者が普通の「猫」ではなく、使える「猫」に変えるため、「猫」に自分が人間になったような錯覚を起こさせたためであろう。つまり「猫」は利用されているということであろう。

「猫」が作者に利用されているということは、金田家を探偵する「猫」からも分かる。

吾輩でも奮發して、敵城へ乗り込んで其動靜を偵察してやらなくては、あまり不公平である。吾輩は猫だけれど、エピクテタスを讀んで机の上へ叩きつける位な學者の家に寄寓する猫で、世間一般の痴猫、愚猫とは少しく撰を殊にして居る。此冒険を敢てする位の義俠心は固より尻尾の先に疊み込んである。何も寒月君に恩になつたと云ふ譯もないが、是はたゞに個人の爲にする血氣躁狂の沙汰ではない。大きく云へば公平を好み中庸を愛する天意を現實にする天晴な美學だ。（『猫』、三章、p.123）

「主人」は虚榮に満ちている實業家、金田家を蔑視し、侮る。これによって金田家も「主人」を嫌がり、「主人」を懲らしめようとしていろいろと策略をめぐらす。「猫」はこの金田家に對して何の對策も講じない「主人」のために、金田家を探偵する。すなわち、「猫」は「主人」の代わりに嫌悪する金田家に對抗して、彼らの一舉手一投足を監視する。自由自在に行動する「猫」は監視者としてこの役に適格であろう。この「猫」は、諧謔味かつ滑稽味はいうまでもなく、作者のメッセージ伝達的手段として利用されたのである。

このように人間に親近感を持ち、「主人」の代役をもする「猫」は、「主人」の分身であるとも言えるだろう。ここでの「猫」と「主人」は同一人物ではないかと思われるくらいに、「猫」が「主人」の心情を看破している。

吾輩は猫である。猫の癖にどうして主人の心中をかく精密に記述し得るかと思ふものがあるかも知れんが、此位な事は猫にとつて何でもない。吾輩は是で讀心術を心得て居る。いつ心得たなんて、そんな余計な事は聞かんでもいい。ともかくも心得て居る。人間の膝の上へ乗つて眠つてゐるうちに、吾輩は吾輩の柔かな毛衣をそつと人間の腹にこすり付ける。すると一道の電氣が起つて彼の腹の中の行きさつが手にとる様に吾輩の心眼に映ずる。（『猫』、九章、p.406）

8) 引用文は夏目漱石（1994）『吾輩は猫である』（漱石全集 第一巻）、岩波書店を用いる。また引用文の注では以下『猫』と略称し、章と頁のみ掲げる。

9) 伊豆利彦（1991）「『猫』の誕生—漱石の語り手—」『漱石作品論集成（第一）』、櫻楓社、p.213

作者は「猫」が讀心術を心得るようになった過程を上記のように弁明しているが、あまりにも空想科學的小説であると言わざるを得ない。これは取りも直さず、作品の目的轉換によって、作者が「猫」に讀心術などを注入させるしかなかったといえよう。結局、讀心術を体得した「猫」は作者のメッセージを伝えるための手段として利用されたのである。

2-3 殺される「猫」

これまで作者の社會批判、文明批判のために利用された「猫」は、十一章の最後の方で再び主人公として登場する。登場した「猫」は、「主人」の書齋に友人と弟子が集まって討論した結果、自殺するしかない世の中であるという「主人」の言葉を受け継いだ形で、みんなが残しておいたビールを飲んで水甕に落ちて死んでしまう。しかしこの「猫」の自殺には大きな疑問が残る。なぜならば「猫」は死を恐れていたはずだからである。

死ぬと云ふ事はどんなものか、まだ経験した事がないから好きとも嫌ひとも云へないが、先日余り寒いので火消壺の中へもぐり込んで居たら、下女が吾輩が居るのも知らんで上から蓋をした事があつた。其時の苦しさは考へても恐しくなる程であつた。白君の説明によるとあの苦しみが今少し續くと死ぬのであるさうだ。三毛子の身代りになるのなら苦情もないが、あの苦しみを受けなくては死ぬ事が出来ないのなら、誰の爲でも死にたくはない。（『猫』、二章、p.84）

「誰の爲でも死にたくない」と述べていた「猫」は、十一章の最後でこれほど嫌がっていた「死」を自ら受け入れて死んでしまう。ということは、役割を果たした猫が、最後に先生達の討論した意見に順応して、その實踐のために死んだのではないだろうか。

主人は早晩胃病で死ぬ。金田のちいさんは慾でもう死んで居る。秋の木の葉は大概落ち盡した。死ぬのが万物の定業で、生きてゐてもあんまり役に立たないなら、早く死ぬ丈が賢いのかも知れない。諸先生の説に従へば人間の運命は自殺に歸するさうだ。油断をすると猫もそんな窮窟な世に生れなくてはならなくなる。恐るべき事だ。何だか氣がくさくさして來た。（『猫』、十一章、p.564）

吾輩は死ぬ。死んで此太平を得る。太平は死ななければ得られぬ。南無阿弥陀仏、タタタタタタ。難有いタタタ。（『猫』、十一章、p.568）

とりわけ、「生きてゐてもあんまり役に立たないなら、早く死ぬ丈が賢いのかも知れない」という部分をみると、任務を終えた「猫」がこれ以上必要でないということは、見当がつくであろう。作者は最後の場面を滑稽に描寫し、作品を終わらせているが、それは作者が作品の意図を猫に託して語った後、猫を殺したとも言えるであろう。もちろん実際に猫が殺されたとしても、そこに暗さと悲惨さは存在しない。それは『吾輩は猫である』の特徴でもある滑稽かつ諧謔的な手法による小説の面白さのためであろう。

3. 『千眼記』における「蠅」の役割

3-1 救われる「蠅」

『千眼記』は、1924年11月9日から1925年7月28日まで、「東亞日報」に連載された『再生』の次に執筆された創作小説である。『再生』は「主人公鳳求を通して三・一獨立運動後の墮落していく社會と利己的個人主義の澎湃に對して批判している」¹⁰⁾作品である。1919年の三・一獨立運動後、日本の植民地政策は一層嚴重になり、その影響は文壇にも及び、言論統制という形で現れる。春園が『再生』で植民地下の狀況を暗示的に描くことができたとしても、日々厳しくなる狀況の中、「蠅」のような動物を表に出さない限りは心情を吐露するような文章を書くのは無理であり、そのような狀況で試図した小説が取りも直さず『千眼記』ではないだろうか。

『千眼記』の「蠅」は、「猫伝」の「猫」が「主人」によって救われたように、「僕」によって救われる。「蠅」がいかに救われたのかその救われ方を見てみよう。

眼をこすって黒い床をじっと見ると、蠅が一匹斃されて、起きられないみたいで、六つの足でもがきながら輾轉反側している。(中略) 黄大監は「何、蠅、そいつがもう出て来たかい」と言い、うんうん唸りつつ立ったとたん、その隅っこの壁にかかっている、古い靴底に棒を入れて作った蠅叩きを取った後、腰を屈めてとぼとぼ歩いてきて、「どこ、どこ」と言いながら探す。「止めてください。まだ眠りから覚めてもいない奴を殺すのなら手だけで殺せるでしょう。可哀想だからそのままにしておいてください。」といい、僕は手を出して蠅を庇った。(『千眼記』、pp.289~290) ¹¹⁾

「僕」は黄大監の家でひっくり返ってもがく「蠅」を發見し、かわいそうだと思って助けようとするが、黄大監はむしろその「蠅」を嫌がり、殺そうとする。しかし「蠅」は幸いにも「僕」が黄大監の行動を止めることによって救われる。

「蠅」は小さく、弱くて殺されやすい、しがない存在であり、植民地下の朝鮮人を象徴しているとも思われる。『千眼記』における「蠅」は『吾輩は猫である』の「猫」より、一層進化して「僕」との意思疎通も可能である。作者は「僕」によって救われた「蠅」を通して作品を滑稽かつ諧謔的に描いている。

3-2 利用される「蠅」

「僕」によって救われた「蠅」は、「僕」に聲をかけるなどして、「僕」を驚嘆させ、「僕」に自分と友達關係になることを提案する。

「數多い生き物の中であなたと私とがこうして會ったことは偶然だといえば偶然だけど、因縁だといえ、因縁にもなるんだよ—だからどうせ會うしかない因縁だったら幸でも不幸でも一緒に住んで行かないか。私は今年には死ぬ命だけど、あなたはその後も數十年も生きていくんだね。でも今年一年、生きている間だけでも御互いに仲良く友達になって生きていかないか。」(『千眼記』、p.291)

10) 拙稿(2003)「夏目漱石『それから』と李光洙『再生』—文明開化を中心として—」『廣島大學大学院教育學研究科紀要 第二部』第51号、p.328

11) 引用文は李光洙 (1971)『千眼記』(李光洙全集 第七卷)、三中堂からの拙譯である。以下『千眼記』からの引用は書名と頁數のみを記す。

「蠅」は「その爺がわが親戚、妻子、眷屬を大勢殺したんだよ。あそこのあの古い靴底はわが血で濡れたものなんだよ」と嘆き、黄大監を罵る行動をとったりする。これほど「蠅」は人間に對して痛い記憶があるにも関わらず、「僕」と友達になろうとする。これは作者が「蠅」を救った後、「蠅」を利用するため、「蠅」と「僕」が友達になるように設定したためであろう。言い換えれば、「蠅」は着想当初から利用されるために計画的に救われたのであろう。このように救われた「蠅」はいかに利用されるのであろうか。

まず、作者は「僕」と友達になった「蠅」に、「僕」の情報提供者として探偵させる。

蠅は僕の耳で「私が部屋について行って何の演劇をするか見て来るよ」と黄主事の汚れている襟につく。(中略 蠅は黄主事が部屋に入ってから出来事を話す。私は便宜上、蠅が見てきたそのままを蠅自身が直接記録しているように記録しようと思う。)(『千眼記』、p.293)

上記の引用は『吾輩は猫である』の「猫」が、金田家を探偵するのと大変類似している部分である。『千眼記』での「蠅」も「僕」の代わりに黄主事の部屋で起きた出来事などを探偵する。僕は「蠅」の一回目の報告に深い興味を持つだけでなく、また蠅の観察力と描寫力に感嘆せざるを得なかった。彼はただ事実を事実のままよく描寫する力があるだけではなく、とてもユーモアの味もする」と「蠅」を評価する。このような「蠅」は「僕」のために探偵として活躍し、利用される。逆に「蠅」と意思疎通のできる「僕」という主人公は、どこへも簡単に行ける「蠅」の便利さに頼って、「蠅」の助言の通り行動する。

トックドンイ爺さんの碑文によって僕は思いがけず出世した。言い換えれば、これは僕がトックドンイ爺さんを葬って碑文を作ったことに對する余薫で、また、蠅の徳だ。僕はさらに蠅を敬うようになった。(『千眼記』、p.308)

況して僕がソウルへ行くなら蠅と相談するのが正しいし、できるだけ蠅と一緒に行くのがよかろう。實狀、蠅がいなくては僕一人で行って新聞記者の職ができそうもない。

(『千眼記』、p.314)

僕はまた何かがあるかじっくり考えてみたが、別にいいアイデアもなく、蠅から聞いた通り答えた。(『千眼記』、p.321)

「蠅」を尊敬するようになった「僕」は「蠅」の忠告に従って行動し、自身の予想外に出世するが、それは作者が「蠅」を利用して「僕」を出世させたためであろう。つまり、「僕」は「蠅」から聞いた情報やアイデアによって出世する。このような「蠅」は、救われた後からほとんどいつも「僕」と一緒に行動するように設定されているが、ある時点から「蠅」の存在は消え、完全に「僕」中心の物語として変っていく。「僕」と哲學者、詩人、革命家、虚無主義者が集まって激烈に現實批判を行なっている場面では「蠅」は消えてしまい、「僕」だけが主人公として残る。この点は『吾輩は猫である』の「猫」の役割と似ており、「蠅」は作者のメッセージを伝えるために、補助人物として利用されていたということになるであろう。

3-3 未完成作品における「蠅」

この小説は未完成のまま終わっているため、最後の「蠅」の行方は不明である。「蠅」は「僕」を出

世させた後、「僕」中心の物語になった『千眼記』から消えてしまう。しかし「僕」が哲學者の自殺に関する手紙を浮萍草から受け、浮萍草を尋ねた際は、「蠅」が再び登場する。だが、「蠅」は何の働きもなく沈黙したままであり、「これから蠅を浮萍草の家に置いてどういう人が来て何をするのか探偵させるつもりだ」という「僕」の意思だけが語られている。このことからみても「蠅」は浮萍草の探偵として利用されるということははっきり分かる。しかし、このように利用された「蠅」は「猫」のように殺された可能性もある。それは次の引用を通して見当が付くであろう。

「私は今年には死ぬ命だけど、あなたはその後も数十年も生きていくんだね。。でも今年一年、生きている間だけでも御互いに仲良く友達になって生きていかないか。」

(『千眼記』、p.291)

「六つの足でつぱり、生きようとして頑張っても一年も生きていられない命」

(『千眼記』、p.316)

事前に「蠅」は一年後、死ぬ命として決められていた。つまり、「蠅」は最初から計画的に利用された後、殺される事になっていたのであろう。これ以外にも「僕」等の討論の中で死に對する論争が激烈に行われるが、この討論振りは『吾輩は猫である』の結末ともよく似ている。しかしながら『千眼記』の「蠅」が『吾輩は猫である』の「猫」のように、「僕」等の討論の結果を受け継いで死ぬようには構想されていない。『千眼記』では「蠅」ではなく、哲學者が自殺を図ることになっている。

「哲學者が失戀をしたことがあります。あの、美人で有名なユアヨンという女性に失戀したことが。しかしそれはもう六・七年前のことだよ。七年も過ぎた失戀に死ぬ人がどこにいるかな。」(『千眼記』、p.345)

自殺の理由は「七年も過ぎた失戀」のためであると述べられているが、それは作品が書かれた1926年から7年前のことだと考えると、折りしも獨立運動が行われた年であることが分かる。それ以後、自由のない植民地支配下で苦しみ、これ以上生きていけないと思った哲學者は不自由より自由を選んで自殺しようとしたのではないだろうか。ここでの「失戀」という言葉は象徴的に使われていると思われる。

『千眼記』の「蠅」は「猫」とは違い、最初から任務を果たした後、死ぬことに構想されていたということとは間違いないであろうが、『千眼記』が未完の作品であるが故に、可能性として推測するしかない。

4. 『吾輩は猫である』と『千眼記』における「文明開化」

『吾輩は猫である』は「猫」の目を通して世の中を見、「猫」の口を通して語らせているが、『千眼記』は「蠅」の目を通して世の中を見、それを「僕」という語り手が聞いて、代わりに語っている。また、『吾輩は猫である』での「猫」と「主人」は、意思疎通が不可能である代わりに、「猫」が讀心術に優れ、「主人」の心さえ讀みとることができるように設定されている。一方、『千眼記』での「蠅」と「僕」は意思疎通が可能で、「僕」が賢い「蠅」に頼って行動を取るように設定されている。この他に、内容的な側面から考察してみると、『吾輩は猫である』と『千眼記』の兩者とも現實社會の批判の手段として執筆されている

るという点からは共通しているが、その批判する対象が違うという大きな差異がある。このような両者の相違点を「文明開化」という立場に立脚して論じてみる。

まず『吾輩は猫である』から探ってみよう。

『吾輩は猫である』は日清戦争を経て、日本が帝國主義的な近代國家を目指して行った日露戦争の最中である、明治時代後半を背景としている。『吾輩は猫である』の二章では、日露戦争に関する描寫が見え始めるが、それは葉書の繪が「猫」の肖像であるにもかかわらず、「主人」が「今年は征露の第二年目だから大方熊の畫だらう」と言うことから、日露戦争を意識していることが見て取れる。しかし、表に出して日露戦争を批判しているというより、むしろそれに無關心である「主人」の姿を通して、日露戦争に賛成していない作者の態度を表出しているといえるであろう。例えば、「旅順が落ちたので市中は大変な景氣ですよ」と言われた「主人」が、「旅順の陥落より女連の身元を聞きたいと云ふ顔」であるとか、「日露の戦役は連戦連勝の勢」であるという手紙をもらった「主人」が、「黙讀一過の後直ちに封の中へ巻き納めて知らん顔」をする。このような「主人」の態度を語るのはもちろん「猫」であるが、全國民が専ら戦争に夢中になっている時期に、「主人」はあまりにも戦争に無關心な姿勢を示しているのは、作者なりの戦争に対する反撥の表現ではないだろうか。また、このような日露戦争に対する否定的な言説は、迷亭の台詞を通して窺える。「僕の小学校時代の朋友で今度の戦争に出て死んだり負傷したものゝ名前が列擧してあるのさ。其名前を一々讀んだ時には何だか世の中が味氣なくなつて人間もつまらないと云ふ氣が起つたよ」と、迷亭は國家の膨大な欲求によって個人を犠牲にする戦争を否定的にみている。日露戦争は、西洋列強に列する帝國主義的かつ國家主義的な近代日本を築くための足場であった。強大な國の建設のため、日本は伝統などは顧慮せず、近代化政策として西洋の文明を無條件に取り入れる。これに對して「猫」は次のように語っている。

「運動をしろの、牛乳を飲めの、冷水を浴びろの、海の中へ飛び込めの、夏になつたら山の中へ籠つて当分霞を食へのとくだらぬ注文を連發する様になつたのは、西洋から神國へ伝染した輓近の病氣で、矢張りペスト、肺病、神經衰弱の一族と心得ていゝ位だ。」（『猫』、p.266）

日常生活の隅々まで「文明開化」の風が吹いて、西洋でよいと認められたのは何でも受け入れ、眞似をするなど、まるで伝染病のようである、と「猫」は批判の發言をする。いくら近代化、西洋化するのが人間の進歩のためであると認識され、受け止められても、「とにかく西洋人風の積極主義許りがいゝと思ふのは少々誤まつて居る」のであろう。漱石は、帝國主義的な近代日本を達成するための日露戦争と、それに伴って無理に強行されている日本の「文明開化」の危險性を鋭く指摘している。

日本の現實社會を否定する「主人」は、「主人」の家に集まった迷亭、八木獨仙、水島寒月、越智東風、鈴木藤十郎、多々良三平との會話の中で、ついに自殺説まで口にするようになる。

「とにかく此勢で文明が進んで行つた日にや僕は生きてるのはいやだ」と主人がいゝ出した。「遠慮は入らないから死ぬさ」と迷亭が言下に道破する。（『猫』、p.535）

このような日本で生きていくより死ぬ方がましだ、という結論は、現實が暗澹であるという、作者の深刻さに對する告發であろう。漱石は、このような日本近代化の弊害を「猫」を利用して語らせているのであろう。

一方、『千眼記』は1919年の知識人を先頭にした、舉族的民族獨立運動¹²⁾失敗後の朝鮮の實態を反映

している作品である。獨立運動當時は、植民地からの解放を目標として、國民全体が國を取り戻そうとする一念で團結してきたが、日本帝國主義の武力彈壓による獨立運動の失敗後は、絶望感と虚無感に陥り、墮落する雰圍氣が造成される。作者はこのような風潮の中で「蠅」を利用して、國民を覺醒させようとする。

たとえば、村の指導者のような人物であった「トックドンイ爺さんを崇拜している」「蠅」はその死を悲しがり、哀悼する。

「万一、トックドンイ爺さんが今晚死んでしまうなら永遠にこの人類の宝物を見る機会を無くしてしまう事だよ。」(『千眼記』、p.297)

「このお爺さんが何もしてないように見えて、實は國の仕事をしていたという意味が分ったかい。」(『千眼記』、p.302)

「讀者の皆さんもお爺さんのために泣いた方がいいのではないのでしょうか。」(『千眼記』、p.306)

「人の命が斷たれるのも瞬間の事よ、一國が亡びるのも瞬間の事だよ。」(『千眼記』、p.315)

獨立運動の指導者として象徴されているトックドンイ爺さんの死を通して、「蠅」は朝鮮もこのまま滅びるのではないかと憂える。そこで「蠅」は、トックドンイ爺さんを継いで、「僕」が新しい指導者になることを希望し、僕を手伝う。「蠅」の助けによって新聞記者になった「僕」は、ソウルで様々な人に出会う。中でも浮萍草という女性に誘われて、「僕」は知識人達の集まりに参加するようになるが、その時点から「蠅」の姿は消え、「僕」は一人の力で行動するようになる。この集會では虚無主義や革命などに對する討論が慎重にかつ激しく行われるが、虚無主義者である無名氏は悲觀的な人生觀の所有者である詩人ハンダルサンに向かって、虚無主義の定義を次のように説く。

「虚無主義を君は知らないんだな。虚無主義とは決して人生そのこと自体を否定することではないんだよ。むしろ人生を肯定することだよ。人生の理性と感情と感覺を一番強く肯定することだよ。ただ否定するのはこの人生の明るい理性と、鋭い感情と、またこの理性と感情の根源になる神聖の感覺を汚し、遮るあらゆる物—すなわち埃だらけであり、汗臭いあらゆる制度—言い換えれば國家、法律、道德、宗教、習慣、風俗という凡ての怪物を否定してしまうことであろう、人生を否定することではないんだよ。我が虚無主義者の清い感覺には人生は決してあなた達のデカダンが言ってるようにそんなに悲しいことでもないし、憎いことでもないし、汚いことでもないし、欠伸が出るくらいになることでもなくて、むしろ朝の太陽のように明るくて石の隙間から出る泉水のように新鮮で甘いものなんだよ。このように人生とは生まれたばかりの赤ちゃんみたいに新鮮なものなのにその悪い制度というのがそれを汚し、遮って、古くて臭くて見とも無いものに作ってしまったんだよ。だから虚無主義者とはこんなのを否定する言葉で、人生自体を否定することだと誤解してはいけない。」(『千眼記』、pp.330~331)

上記の「埃だらけであり、汗臭いあらゆる制度」とは、封建制度や惡習などを指す言葉であり、その具体的な例として「國家、法律、道德、宗教、習慣、風俗という凡ての怪物」が擧げられている。一見すると、「國家、法律」などは旧制度ではなく新制度であると思われ、前後の話が矛盾しているように

12) 「三・一運動は、知識人を先頭に農民層を中樞勢力にして、民族資本家と労働者階層を始めとする社會の各界各層が参加した學族的民族獨立運動である。」(梨花女子大學校韓國文化史編纂委員會編(1981)『韓國文化史』、成甲書房、p.295)

見える。しかし、この「國家と法律」というのは、完全に近代化された近代制度ではなく、旧制度が曖昧に混ざっている中途半端な反封建的な制度を指す言葉であろう。作者は封建制度と共に反封建制度をも含めて批判していると言える。無名氏は「神聖の感覺」と「赤ちゃんみたいに新鮮なもの」を汚す悪い制度を否定することで、虚無主義者に對する誤解を解こうとする。ここで何より重要なのは、旧制度や悪習に對する無名氏の批判である。春園は、植民地からの脱却のため、旧制度から脱し、日本のような「文明開化」を成し遂げて、日本のような強大な國になることを望む。このような春園の基本方針は、1917年の『無情』に詳しく描かれているが、それから9年も過ぎた『千眼記』に至っても、基本的な方針は変わっていない。春園は疾うから朝鮮は「文明開化」できなかったため日本の植民地になってしまったと考え、朝鮮も「文明開化」を急ぐことを奨励する。もちろん『千眼記』では「文明開化」という言葉として言及してはいないが、相変わらず「埃だらけであり、汗臭いあらゆる制度」に對する鋭い批判を行なっている。しかし、詩人ハンダルサンはその旧制度からなかなか逃れられない現實について、次のように述べている。

「人間は蝸牛と同じで、体から一種の漿液が出るんだよ。それが一日中だらだら流れてどこかに行ってしまうばいいのに、世界を創造した悪戯っ子がそのように作っておいたからその漿液がだんだん凝り固まって、ついに硬くて狭い殻を作って蝸牛の体をきゅっと包むんだよ。万一その蝸牛が君のような虚無主義者なら、怖い革命を起こしてその殻を脱いでしまおうだろう。しかしその殻がもともと硬く蝸牛の肉にはりついていたので、それを脱いでしまう時は血を大量に流して死んでしまおうだろう。もし幸いにも生き残ったとしても、体にはやはり漿液が流れて、古い殻の代わりにまた新しい殻が出来るのをどうするんだ。それで結局蝸牛は当然のように、殻の中で暮すようになってしまうんだ。見てごらん。世の中に殻のない蝸牛がどこにいるのか。人間もそんなものだろう。自分がいくら革命をし、身悶えしても、その古い殻を脱ぐのが可能だと思うか。」（『千眼記』、p.331）

抑壓されている不自由な人間を、殻に閉じ込められた蝸牛に例えて比喩的に表現しているが、これは二重的な意味を内包していると思われる。つまり、旧制度から自由になりにくい社會と、植民地から解放されにくい現實、兩方を象徴的に描寫しているのではないだろうか。言い換えれば何百年も継承されて染み付いている旧制度が、近代化されたとしてすぐ変わるわけでもないし、三・一獨立運動後、植民地支配に抵抗する朝鮮を警戒する日本は、一層残酷な弾壓を加える中、いくら腕き、抜け出そうとしてもなかなか思った通りにはいかないのである。このような現實下で詩人ハンダルサンは、むしろ逃れられない現實狀況について悲觀的な姿勢を取る。これに對して「僕」は、悲觀するよりむしろ死んだ方がいいと強く叱責する。詩人ハンダルサンを非難する「僕」の言行を見ると、絶望と虚無に陥っている青年達を覺醒させて、亂れている社會風潮を克服し、トックドンイ爺さんのような指導者の後継者として解放運動を再現しようとする彼の氣勢が讀み取れるであろう。

「僕」と詩人ハンダルサンとの辛辣な討論の途中、「まるでたった今血みどろの戰場から駆け込んでくる革命軍の兵士」のような「マ革命」という人物が加わる。

「人生は階級闘争だ。革命だ。戦いだ。血を流すことだ。無産者！虐待された無産者の血でブルジョアの奴らが汚した世界を洗ってしまうことだ。眞晝に欠伸とか寝言をするやつらを捕まえて血の法事することだ—それから自由と平等の原理の上で新しい社會を建設することだ。罪の多いブルジョアの奴らの太った体で柱の下を固めてプロレタリアの新社會を建設することなんだ！」（『千眼記』）

、p.333)

「マ革命」はブルジョア階級を批判するなど、社会主義者的な側面に立ってプロレタリア階級を擁護しているが、これは当時の時代的な雰囲気の影響でもあろうし、また、旧制度と植民地からの革命を叫ぶ象徴的な部分であるとも思われる。春園の中では旧制度からの脱却こそが植民地からの解放であり、また、「文明開化」すること自体が独立できる方法であったのであろう。

以上のように『吾輩は猫である』と『千眼記』は、ともに動物を登場させて社会批判の物語を展開させていくが、時代と状況が違うため、その批判する内容はかなり違うことが明確になった。

5. おわりに

イギリス留学を通して「自己本位」という新たな概念を手にした漱石は帰国後、西洋とは乖離のある、日本の近代化の中で悩まされ、その突破口として創作活動に取り掛かる。もちろん『吾輩は猫である』の執筆は、高浜虚子の勧誘によって始めたが、漱石の内面的な葛藤を表出し、それへの解決策の模索のための手段でもあったのであろう。最初の一章を書く際の漱石は、「猫」中心の話を、写生文の記法を利用して豊かな筆致で描いており、それが「猫伝」を書いた主な目的でもあった。しかし、その続きとしての二章からは、単純な写生文の試作として執筆したというより、日露戦争に触発されて書き、戦争に対する反感とともに、近代日本の「文明開化」に対する批判のために書いたのである。このような執筆動機の変化が、「猫」中心の話を「主人」中心の話に切り替えたのである。つまり、「猫伝」での「猫」は語り手かつ主人公であったが、次第に主人公としての「猫」より、語り手としてのみ存在するようになったのである。これは、漱石が苦闘している問題を吐露する場として、『吾輩は猫である』を利用したためであろう。「猫」は作品の目的轉換によって利用され、最後は作者の意思を受け継いで自殺する。要するに作者によって「猫」は殺されるのである。

一方、春園は1919年三・一独立運動の失敗後、挫折と喪失感によって揺れる社会と、酷烈な植民地支配に対する反感の表出の方法として、作品を書き続ける。このような意図で書かれた作品の一つがまさに『千眼記』であろう。『千眼記』は独立運動の失敗後、彷徨、墮落した社会に対する叱責とともに、旧制度の廃止と革命を主張するが、それは植民地支配から脱却するための手段であった。作者は「蠅」を利用して自分の悩みを解決しようとするが、厳しい植民地下での『千眼記』は未完成のまま終わるしかなかったであろう。

このように両作品とも動物が、作者とも思われる「主人」と「僕」に救われ、利用される構造を取っている。これがまさに両作品の共通点であるといえよう。両作品はこのような仕組みだけではなく、登場人物なり、内容の展開なり、一致する点が多々ある。しかし反面、両作品は書かれた目的が異なるため、辛辣な現実批判を行っているとしても批判及び抵抗している対象が異なる。漱石は帝国主義の道を歩む日本と、そのために西洋文明を余儀なく取り入れている日本の「文明開化」に対して批判をしているが、春園は日本の植民地統治に対する抵抗とともに、その中で挫折する風潮に変わっていく当時の朝鮮人社会を批判し、この状況から克服するため旧制度と悪習を否定するなど、革命の必要性を披瀝しているのである。つまり、春園は漱石とは違い、植民地から逃れるためにむしろ「文明開化」をしなければならないことを暗示的に表しているのである。これが両作品の相違点であるといえ、「猫」

と「蠅」はこのような作者の意図を伝えるために利用された動物であり、これがまさに「猫」と「蠅」の役割であるといえるだろう。

【参考文献】

- ・李光洙(1971)『多難の半生の道程』(李光洙全集 第八卷)、三中堂、pp.445~457
- ・李光洙(1971)『文芸雑纂』(李光洙全集 第十卷)、三中堂、pp.586~587
- ・韓承玉編(2002)『李光洙文學事典』、高麗大學校出版部
- ・伊豆利彦(1991)「『猫』の誕生—漱石の語り手—」『漱石作品論集成 第一』、櫻楓社、pp.205~216
- ・拙稿(2003)「夏目漱石『それから』と李光洙『再生』—文明開化を中心として—」、『廣島大學大学院教育學研究科紀要 第二部』第51号、pp.327~335
- ・日比嘉高(2001)「吾輩の死んだあとに」『漱石研究 第十四号』、翰林書房、pp.149~163
- ・三好行雄 編(1982)『夏目漱石事典』、學燈社
- ・梨花女子大學校韓國文化史編纂委員會編(1981)『韓國文化史』、成甲書房
- ・李國棟(2001)『魯迅と漱石の比較文學的研究』、明治書院、pp.74~111
- ・柳相熙(1982)「漱石の『吾輩は猫である』と春園の『千眼記』との比較—動物の働きと諷刺性を中心に—」『龍鳳論叢』第1輯、全南大學校、pp.351~369

【テキスト】

- ・夏目漱石(1994)『吾輩は猫である』(漱石全集 第一卷)、岩波書店
- ・李光洙(1971)『千眼記』(李光洙全集 第七卷)、三中堂、pp.289~349

要 旨

本論文では漱石の『吾輩は猫である』と春園の『千眼記』を兩作家の永遠のテーマの一つである「文明開化」を中心として比較考察した。兩作品は擬人化されている「猫」と「蠅」を通して物語を滑稽かつ諧謔的に描くのみならず、さらに「猫」と「蠅」の役割が兩作品の主題を解決するのに大きな手掛かりになっている。それでは兩作家はこのような動物の役割を通して何が言いたかったのだろうか。それを究明するのが本稿の目的である。

考察の結果、「猫」と「蠅」は「主人」と「僕」に救われて、利用され、殺される役割を持っており、兩作品とも現實社會の批判のため「猫」と「蠅」が利用されていることが明確になった。これが兩作品における共通点であろう。しかし兩作品の置かれている歴史的背景と条件が異なるため、批判している対象と内容がかなり異なる。『吾輩は猫である』は近代化を進めていく日本が西洋列強と肩を並べるため國家主義的かつ帝國主義的な近代國家への意志を膨張させ、無理に戦争や「文明開化」などを行っているため、個人は一層惨めな生活に苛まれなければならないと指摘し、猛烈に批判している。一方『千眼記』は1919年三・一獨立運動の失敗後、挫折と共に解放への意志が薄れていく社會風潮の中、「悪い制度」「旧制度」「悪習」などが植民地からの解放の障害になるので、それらを撤廢し、「文明開化」をしなければならないというメッセージを込めている。これがまさに兩作品の相違点であろう。

以上、「猫」と「蠅」の役割を通じた考察によって『吾輩は猫である』と『千眼記』における漱石と春園の「文明開化」に對する異なる立場が明らかになった。このことは、兩國の近代化の中で苦闘した二人の作家像、ひいては兩國の近代化のあり方を追究していくのに重要な意味を持つと思われる。

キーワード：漱石・春園・吾輩は猫である・千眼記・猫の役割・蠅の役割・日露戦争・
植民地時代・近代化・文明開化

투 고 : 2004. 2. 28
1차 심사 : 2004. 3. 13
2차 심사 : 2004. 4. 3

住 所 : 日本 廣島縣 東廣島市 西條東北町 10-6-401
電 話 : (日本) 082-422-6091 (FAX 겸용)
E-mail : wugigirl@hotmail.com